

ペットも歳をとります…高齢ペット介護は満点飼い主だけの特権

✿ ペットの老いと向き合う

私たちと同じように、ペットも歳をとります。ほとんどのペットは人よりも寿命が短いので、生活に潤いや安らぎを与えてくれたペットの最期をみとるのは、飼い主の義務ともいえるでしょう。老いたペットをみとるのは飼い主にとって辛く悲しいことです。しかしそれは、不慮の事故や病気でペットを死なせなかったことでもあります。満点飼い主を目指して努力してきた証とも言えるのではないのでしょうか。

ペットが歳をとると、若いころの活発さはなくなりませんが、ゆったりと落ち着いた時間を過ごせるなど、また違った付き合い方があります。老いた時こそ、個々のペットの性格や好みを知り尽くした飼い主の愛情の見せ所ではないのでしょうか。ペットにとって、飼い主の愛情が全てなのでから。



■ 人間の年齢に換算した犬・猫の年齢の目安*

犬・猫の年齢	人間の年齢に換算した年齢	
	大型犬	小・中型犬、猫
1歳	12歳	15歳
2歳	19歳	24歳
3歳	26歳	28歳
4歳	33歳	32歳
5歳	40歳	36歳
6歳	47歳	40歳
7歳	54歳	44歳
8歳	61歳	48歳
9歳	68歳	52歳
10歳	75歳	56歳
11歳	82歳	60歳
12歳	89歳	64歳
13歳	96歳	68歳
14歳	103歳	72歳
15歳	110歳	76歳
16歳	117歳	80歳
17歳	124歳	84歳

*品種や飼育環境等によって違ってきます。

✿ ペットが歳をとると

「高齢」といわれる年齢は、動物種や品種、生活環境などにより異なります。一般にペットが高齢になると、視力、聴力、嗅覚などの感覚が衰え、動きが鈍くなり、睡眠や休憩している時間が長くなります。それと同時に、被毛が白くなる、眼が白く濁る（白内障）、筋肉が衰えて足腰が細くなるなどの外見的变化が見られるようになります。犬など日常的に散歩や運動をする動物では、散歩に行きたがらなかつたり、運動を嫌がることもあります。しかし、病気のせいでも食欲・元気がなくなつたり、動きが鈍くなることもありますから、健康状態の変化を一概に「歳のせい」と決め付けるのではなく、獣医師に相談して適切な診断・治療をする事も大切です。

高齢のペットの世話には、これまで以上に注意を払いましょう。消化機能が低下してきますから、食餌にも気を配り、大きさや固さなどを考慮して、食べやすく栄養バランスのとれた食餌を与えましょう。また、運動機能が低下してきますから、段差を無くすなど生活環境にも気を配り体に無理のない飼育環境を整えるようにしましょう。散歩や運動を嫌がる場合は無理にさせず、体に適度な刺激を与え、気分転換になる程度にしましょう。体温調節機能も低下してきますから、若いころは耐えられた温度変化も老いたペットには大きなストレスになります。外飼いの犬は室内飼いにしたり、寒暖に合わせて敷物や巣材を変えるなど、きめ細かい世話が必要になります。排泄もパターンが変わって頻回になったり、失敗したりするようになることもありますから、状態に合わせて適切に対応しましょう。

高齢のペットはいわゆる認知症の症状を示すこともあります。例えば犬や猫では、異常な食欲、無目的な吠え、飼い主の姿が見えなくなると鳴く、無目的に歩き続ける、不適切な排泄など、様々な症状が現れます。高齢のペットに急激な環境の変化はよくありませんが、生活に刺激があると認知症は進みにくいと言われていています。飼い主とのふれあいを好むペットにはゆったりとしたスキンシップやブラッシングをしたり、一緒に簡単なゲームをするなど体と心にほどよい刺激を与えるといいでしょう。また、頭を使うおもちゃを与えたり、生活にちょっとした変化をつけるなど適度な刺激を心がけましょう。